

「研究論文」

熟達教師が理想とする学級をつくるプロセスの研究

－質的データ分析手法 SCAT を用いて－

松永 万希子（長崎大学教育学部小学校教育コース）

本多 博（長崎大学大学院教育学研究科）

1 はじめに

本研究の目的は、熟達教師が理想とする学級をつくるプロセスを明らかにすることである。

筆者は、実習での参観を通して、学級担任の日常の手立てが学級理念に深く関係していると感じ、熟達教師が理想の学級をつくるまでの過程に興味を持った。白松（2018）は、学級経営の在り方が子どもの人格形成に大きく関わるものであり、よい影響を与える学級を創造することが学級経営の柱であると述べている。また、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2018）では、学級・ホームルーム経営の充実を図り、子どもの学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものとしていくことが重要であると示されている。これらのことから、子どもの成長を促すには学級経営の充実は必要であるといえる。一方で、熟達教師の学級をつくる過程を分析した研究は、まだ十分とはいえない。

そこで、本研究では熟達教師へのインタビューを質的データ分析手法 SCAT を用いて分析し、理想とする学級をつくる過程の図式化を通して、熟達教師が学級をつくる仕組みを明らかにする。

2 研究の方法

2.1 研究の概要

【対象】

長崎県内にある X 小学校 2 学年 1 学級 26 名の児童とその担任教師

【実施期間】

2018 年 6 月 5 日～12 月 18 日のうち計 13 日間

【研究方法】

1. 研究の対象学級に入り、学級の実態や熟達教師の手立てについて観察する。
2. 熟達教師へインタビューを実施し、質的データ分析手法 SCAT を用いて分析する。
3. SCAT による分析をもとに、熟達教師が理想とする学級をつくるプロセスを図式化する。

2.2 学級観察について

本研究は、長崎県内のある小学校 2 年生の 1 学級を対象に実施した。子どもの変容を捉えるため、2018 年の 6 月に 2 回、9 月～11 月は週に 1 回の頻度で学習支援員として入った。子どもたちと直接触れ合いながら、学級担任である熟達教師の子どもたちに対する手立てに着目し、観察を行った。

2.3 熟達教師の特徴

本研究の対象学級である2年Y組の学級担任は、勤務歴30年を超える熟練教師であり、同じ職場の仲間からも頼りにされ、慕われている。特別支援学級を受け持った経験もあることから、現在は学校で特別支援教育コーディネーターを任されており、特別な配慮を要する子どもへの対応に長けている。また、大学院の学生を積極的に受け入れ、学級の実態を外に発信する姿から、現状に甘んじることなく、常に学び続ける教師としての情熱を感じることができる。

このように、2年Y組の学級担任は周りからの信頼も厚く、教育の専門家としての確かな力量を持つ。

2.4 インタビューについて

本研究に出てくるインタビューとは、10月29日に実施した熟達教師への半構造化インタビューを指す。日々の授業観察で見取った教師の言動を踏まえたうえで、教師の言動とその裏に隠された教師の思いをつなげるために実施した。なお、このインタビューは、ボイスレコーダーで録音し、SCATを用いて発話分析をかけた。以下、インタビューの質問事項をまとめたものである。

【インタビューの質問項目】

- ①教師という仕事をする上で大切にしていること
- ②目指す学級集団の姿
- ③その集団をつくるために心がけていること
- ④子どもと接する上で大切にしていること
- ⑤朝の会、帰りの会を通して子どもたちに何を伝えたいか、何を育てたいか
- ⑥ほめる時に気を付けていること
- ⑦授業をする上で意識していることを3点
- ⑧特別な支援を要する子への対応で意識していること（普段の生活、授業）
- ⑨席替えの意図
- ⑩掲示物の工夫
- ⑪子どもに平等に接するために意識されていること

2.5 SCATについて

本研究では、熟達教師へのインタビューを、大谷（2011）が開発した質的データ分析手法のSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。SCATを用いた目的は、熟達教師のインタビューでの語りから、熟達教師の目指す「一人一人が居心地の良い学級」をつくるうえでの信念や思いについて読み解き、その思いがどのような手立てとして学級の中に組み込まれているか検討するためである。

3 SCATによる分析と考察

3.1 SCATとは

SCAT（Steps for Coding and Theorization）とは、大谷が開発した質的データ分析手法である。質的研究の分析の困難さを克服するために開発された手法であり、初学者が着手しやすい質的研究の方法の一つである。大谷（2008）は、「SCATは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、

- 〈1〉 データの中の注目すべき語句
- 〈2〉 それを言いかえるためのデータ外の語句
- 〈3〉 それを説明するための語句
- 〈4〉 そこから浮き上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく 4 ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。」と SCAT について説明している。

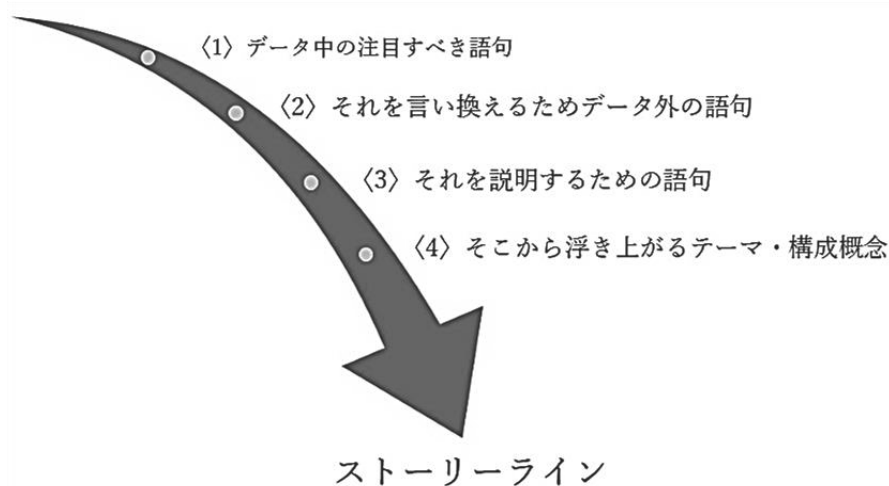


図 1 SCAT についての概要

3.2 結果・分析

SCAT を用いて、熟達教師へのインタビューを分析するにあたり 77 のテキストに分割した。ここで指すテキストとは、熟達教師とのインタビューのやりとりを意味ごとに区切ったかたまりのことである。なお、今回は質問項目「②目指す学級集団の姿」と「③その集団をつくるために心がけていること」についてのテキストを抜粋した SCAT の表を示す。

表の見方については、左から順に「テキストの数」「発話者」「インタビューでのやりとり(テキスト)」「〈1〉テキスト中の注目すべき語句」「〈2〉テキスト中の語句の言い換え」「〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容」「〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念」となっている。今回は熟達教師の発話のみ分析にかけているため、聞き手のテキストは「〈1〉テキスト中の注目すべき語句」から「〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念」までが空白となっている。また、熟達教師の発話と聞き手の発話を区別しやすいように、聞き手の発話は文字列を斜体にして表現した。

表 1 SCAT による熟達教師へのインタビューの分析 (一部抜粋)

番号	発話者	テキスト	<1> テキスト 中の注目すべき 語句	<2> テク スト中の 語句の言 いかえ	<3> 左を説 明するよう なテキスト 外の概念	<4> テー マ・構成 概念
8	聴き手	理想とする学級はどのような学級でしょうか。				
9	熟達教師	学級の姿ってというのは、一人一人が居心地よく感じる学級づくりっていう、所属感があったりとか、自分の居場所はここなんだって、というのが大事かなと思います。ふらふらしている子は、行き場がないのかなと思います。ここにいたら安心とか、そういう場所を見つけきれないのかなと思います。居づらかったり、ここにきたらまたなんか言われるとか、友達のおらんとか、そういう風になったら悲しいなと思う。	一人一人が居心地よく感じる学級づくり。所属感があったりとか、自分の居場所はここなんだ。ここにいたら安心。	個に応じた。安心。所属。学級経営。	教師の働きかけ (反映)。学級担任 (条件)。学級経営 (影響)。心理的安全性 (一般化)。	所属感を重視した学級経営理念。所属感と心理的安定の正の相関関係。
10	熟達教師	そうなる前に、友達作りや仲間作りっていうのは本当に一人一人を見ておかないと、おとなしい子でもこっちもわざとね、友達おらんねと思ったら、席でこの子話しかけきるかなっていう子をわざと席替えをしたりします。	友達作りや仲間作りっていうのは本当に一人一人を見ておかないと。席替え。	個に応じた。子どもの見取り。児童理解。子ども同士の関係性。教室環境。かけの支え。	特性 (背景)。子どもの内面 (原因)。洞察力 (条件)。教師の裏のサポート (条件)。成就感 (結果)。	本質を見ようとする意識。子どもからは見えない教師のサポート。
15	聴き手	居心地の良い学級をつくるための手立てなどありますか。				

16	熟達教師	一人一人の声かけとか、注意をしても必ず何かでほめること。	一人一人の声かけ。注意をしても必ず何かでほめる。	一人一人に合った。自己肯定感の向上。	多様性（影響）。個性（影響）。教師の承認（条件）。自尊感情（結果）。	承認を基盤とした声かけ。承認と居心地の密接な関係。
17	熟達教師	集団っていったら、私が発する言葉によって子どもが「あの子はダメなんだ」とか、担任が子どもへの投げかける言葉によって、周りの子どもたちが「この子はこうなんだ」と判断するじゃないですか。	担任が子供への投げかける言葉によって、周りの子どもたちが「この子はこうなんだ」と判断するじゃないですか。	担任の影響力。	ハロー効果（背景）。担任の影響力の大きさ（影響）。教師の発言の重み（背景）。言葉の選定（条件）。	担任の言葉かけが子どもに及ぼす影響の大きさ。
18	熟達教師	なので、そうならないようにどの子どもも平等で、でも良いところはそれぞれあるんだってことを伝えたいなと思っています。注意をする時は、ちゃんと注意をしなきゃいけないけど、けどみんなそれぞれに良さがあるんだってことは、みんなの前でそれは言いたいなって。あんまりにも注意しすぎたなって時は、あえてこんな良いところがあるんだよねってことも必ず付け加えています。	どの子どもも平等で、でも良いところはそれぞれあるんだってことを伝えたい。みんなの前でそれは言いたいな。あんまりにも注意しすぎたなって時は、あえてこんな良いところがあるんだよねってことも必ず付け加えています。	公平。承認。個性。自己肯定感の向上。子ども同士に承認。	子どもの確実な見取り（条件）。教師の承認（条件）。認め合う関係（結果）。支持的風土の形成（結果）。性善説（影響）。	性善説。子どもそれぞれの良さを伝える声かけ。子どもが互いに認め合う関係の基盤づくり。学級全体の前。
19	熟達教師	注意をするにしても、こういうのは残念だよって、ちょっと悲しいねとかそういう言葉を付け加えると良いかなと思います。	残念だよって、ちょっと悲しいね。	相手の立場に立った感情。	アイメッセージ（一般化）。行動への価値づけ（結果）。	アイメッセージ。

20	熟達教師	一人一人の声かけで、いつも帰る時はタッチをするんだけど、今日はこの子にあまり声かけしてないなという子がいたら、その時に今日はこんなこと頑張ったねという声かけを一言でもしてやるってこととか。	今日はこの子にあまり声かけしてないなという子がいたら、その時に今日はこんなこと頑張ったねという声かけを一言でもしてやる。	公平. 教師が見てくれているという安心感.	子どもの確実な見取り(条件). 教師の承認(条件). 学級担任の意義(背景). 信頼関係(結果). 居心地(結果).	身体的な触れ合い. 子どもの頑張りを承認する声かけ. 公平性.
----	------	--	--	-----------------------	--	---------------------------------

SCAT の表の<1>から<4>の言葉を紡いで文脈化し、深層の文脈としてストーリーラインを記述した。以下は、分析から得られた熟達教師の学級経営の理念についてのストーリーラインである。

【ストーリーライン】

この熟達教師は仕事をする上で、再現性がない学級に価値を見いだしており、そのことから教師という職業の特殊性からなる責任を自覚している。このことは、教師としての信念として持っており、再現性がない学級だからこそ、変化に対応するために持続的に学び続ける反省的実践家となる必要があると考えている。また、学級編成を一つの区切りとして捉えており、子どもが再生する機会とみなしているため、常に新鮮な気持ちで向き合いたいと教師としての意気込みを語っている。

熟達教師の目指す学級像は、一人一人が居心地よく感じる学級である。居心地の良さは所属感によって生じると考えており、そのような学級の土台として、教師の承認の声かけが必要であると熟達教師は捉えている。そのため、日常生活の中での子どもの頑張りがや良さに積極的に目を向け、公平さを意識した賞賛や承認を基盤とした学級経営につながっている。その際、集団の中での学級担任の言葉は子どもに大きな影響を及ぼすという認識から、学級全体の前で承認の声かけを行うことを重要視している。また、子どもは教師の鑑であると捉えているため、学級担任が積極的に賞賛する姿勢は、相手の良さに気づき承認する子どもの育成を促進し、結果的に子どもたちが互いに認め合う関係を促進することにつながると熟達教師は考えている。さらに、学級担任の承認は、子どもの自己肯定感を向上させ、自信を持って自発的に取り組む気持ちを高める効果があると熟達教師は指摘している。そのことをいかし、個性を発揮させる場を設けるなど子どもの個性や自発性をいかした学級の組織化を図っている。承認の声かけを行うためには、子どもの確実な見取りが必要であると熟達教師は認識している。その際、曇りのない目で子どもたちを見て、本質を見ようとする意識を持ちながら個に応じた指導を行うことに価値を抱いている。そのことは、個性の伸長に重視した学級経営にもつながっている。熟達教師は、これらの学級理念を踏まえ、明日への期待感を高める学級を目指している。その際、一日の終わりに価値を見いだしており、学級経営を構造化しながら指導の工夫

を凝らしている。さらに、日常的に努力の価値と規範意識について伝えることで、その意識の定着を図っている。また、努力を視覚化したり、ルーティン化したりするなど学級経営を緻密化しながら、子どもの将来を見据えた指導を行っている。

授業においては、めあてとまとめの整合性を重要視している。特に、めあてについては目標達成における見通しとして必要だと語っており、見通しが持てるような手立てが学級経営にも組み込まれている。また、全体を掌握する必要性についても語っている。この意識は、授業構成の緻密化や見通しを持たせるための的確な指示に反映されており、学級が崩れる要因である曖昧な時間の排除を徹底している。さらに、学力が下位や上位の子どもそれぞれに合った、個に応じた目標を設定し、達成感から得られる学習意欲を促進している。

3.3 考察

3.2 の SCAT の表とストーリーラインをもとに、熟達教師の学級経営のとらえ方を図式化したものを図2で示す。図2に出てくる矢印は、それぞれの要素の因果関係を示している。なお、太い矢印は、熟達教師が特に重要視している学級経営の過程を示したものであり、熟達教師が目指す「一人一人が居心地の良い学級」をつくるプロセス（図3）の作成のもとになるものである。

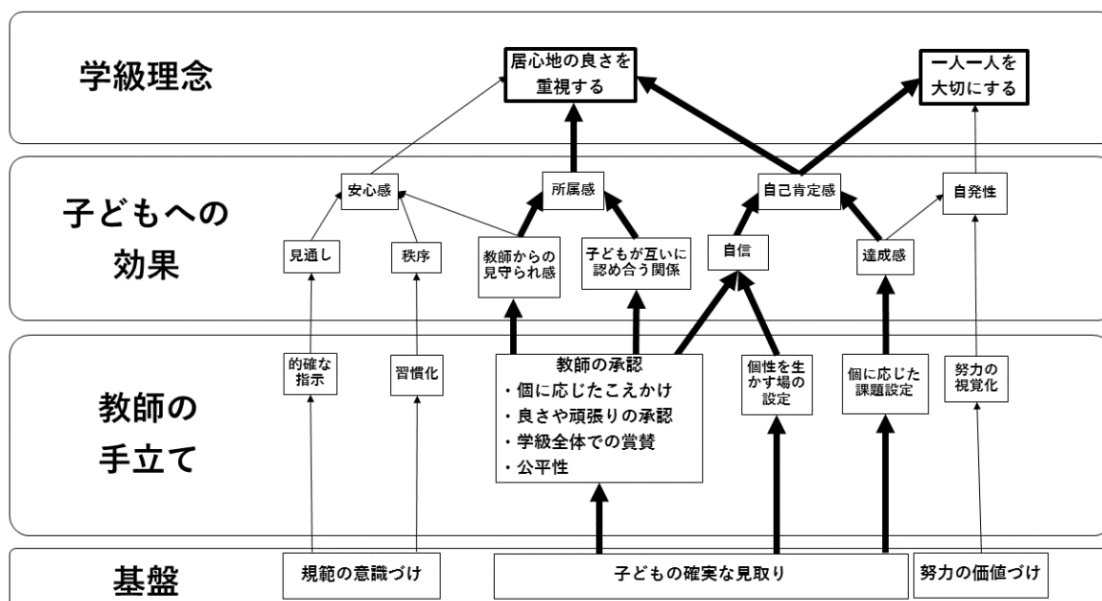


図2 熟達教師の学級経営の概念図

図2で示すように、熟達教師の学級経営は「基盤」「教師の手立て」「子どもへの効果」「学級理念」の4つの段階に分かれていることが読み取れる。基盤については、教師の信念が影響しており、子どもたちに常に伝えている「規範意識」や「努力の価値」などが基盤となる。また、子どもの本質をみようとする「子どもの確実な見取り」も学級経営の基盤となってくる。これらの基盤をもとに、「教師の手立て」が行われる。様々な教師の手立ては、子どもに影響を与え、子どもの成長や変化などの「子どもへの効果」が表れる。子どもの成長や変

化は、やがて「安心感」「所属感」「自己肯定感」につながり、学級理念である「居心地の良さ」へ、「自発性」は学級理念である「一人一人を大切にすること」につながっていく。

この図2を見て分かるように、熟達教師は、学級経営を構造化し、緻密化させながら、理想とする学級を築いている。

次に、図2をもとに、熟達教師が目指す学級像である「一人一人が居心地の良い学級」をつくるプロセス（図3）を図式化した。

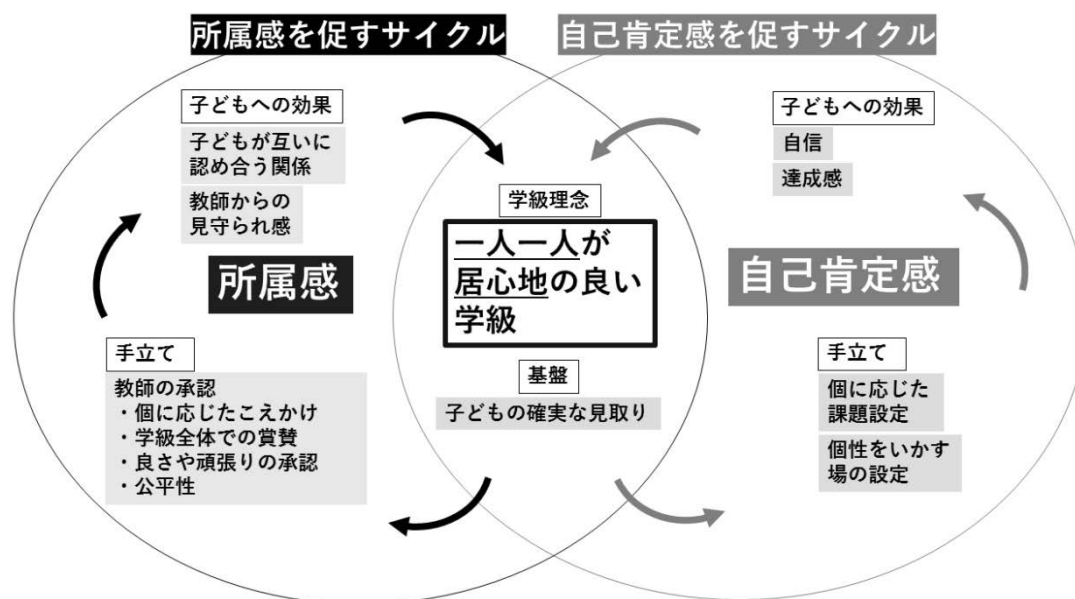


図3 熟達教師の理想とする学級をつくるプロセス

図3で示すように、熟達教師は、学級理念である「一人一人が居心地の良い学級」をつくるために、子どもの所属感と自己肯定感の向上を促す一定のサイクルを循環させ、習慣化させながら学級経営を行っていることが読み取れる。このサイクルは、基盤の「子どもの確実な見取り」から始まり、その基盤が「教師の手立て」へと変わり、その手立てが「子どもに効果」をもたらし、最終的に学級理念である「一人一人が居心地の良い学級」を築くことにつながる。さらに、この熟達教師は、3.2のストーリーラインでも述べたように、「教師は変化に対応するために持続的に学び続ける反省的実践家となる必要がある」と考えているため、再度、基盤である「確実な子どもの見取り」に立ち返る。このようなサイクルを循環しながら、熟達教師は学級経営を行っていることが明らかとなった。

熟達教師が捉える一人一人が居心地の良い学級には、子どもの「所属感」と「自己肯定感」が大きく関係していることが図3から読み取れる。SCATの表とストーリーラインより、この「所属感」と「自己肯定感」の向上が居心地の良さを生み出していると考えられる。

「所属感」を生み出す過程としては、基盤である子ども一人一人の本質をみようとする「子どもの確実な見取り」から始まり、この基盤を踏まえた教師の手立てとして「教師の承認」を行っていることが分かる。教師の承認は、個に応じた声かけを行ったり、良さや頑張りを伝えたりするなど多様な手立てとして行われる。その際、公平に子どもたちに声かけを

することを熟達教師は重視している。また、「集団の中での学級担任の言葉は子どもに大きな影響を及ぼす」という認識を熟達教師は持っているため、学級全体の前で承認の声かけを行うことを重要視している。「教師の承認」により、子どもには「子どもが互いに認め合う関係」の構築や「教師からの見守られ感」を感じるなどの効果が表れてくる。この効果については、熟達教師の実体験からも語られている。こうして、「子どもが互いに認め合う関係」や「教師からの見守られ感」が高まることで、所属感が生まれ、その結果学級理念である「一人一人が居心地の良い学級」につながっていく。

「自己肯定感」を生み出す過程としては、所属感と同様に基盤である「子どもの確実な見取り」から始まり、この基盤を踏まえた教師の手立てとして「個に応じた課題設定」や「個性をいかす場の設定」を行っていることが分かる。この取組によって、子どもの「自信」や「達成感」が生まれ、その結果自己肯定感の向上へとつながる。この自己肯定感の向上によって、学級理念である「一人一人が居心地の良い学級」が形成されていく。

これらの「所属感」と「自己肯定感」を向上させる過程を経て、熟達教師は学級理念である「一人一人が居心地の良い学級」を築いていることが分かる。

4 まとめ

本研究では、熟達教師が理想とする「一人一人が居心地の良い学級」をつくる学級経営のプロセスを明らかにするために、熟達教師へのインタビューをSCATを用いて分析を行った。分析を行った結果、熟達教師の学級経営の理念と日常生活における教師の手立ての関係性が明らかになった。これによって、以下の知見が得られた。

第一に、子どもの確実な見取りに基づいた教師の承認は、子どもが互いに認め合う関係づくりを促進するということだ。子どもの本質に目を向け、確実に子どもを見取ることで、その子の良さや頑張りに気付くことができる。その頑張りや良さを学級全体で共有することで、周りの子どもがその子の頑張りや良さを認める機会となり、子どもが自分に自信を持つことにつながる。また、子どもは教師の鑑であるため、学級担任が積極的に賞賛する姿勢は、相手の良さに気付き承認する子どもの育成を促進し、結果的に子どもたちが互いに認め合う関係を促進することにつながる。

第二に、熟達教師は理想の学級を築くために、構造化・緻密化した学級経営を循環させて学級の力を高めているということだ。SCATの分析によって、理想の学級をつくるために行う熟達教師の手立ては、緻密に学級経営に組み込まれ、一定のサイクルを循環させながら行われているものと分かった。

しかし本研究では、一事例のみを分析対象としていることに留意する必要がある。したがって、すべての事例に適用できるわけではない。しかし、SCATによる分析は、複数の小規模データを紡いで大規模データへと分析を進めていける特徴をもつ(大谷, 2008)ことから、具体的事例を深く掘り下げて分析していくと共に、複数の小規模データを積み重ね、理論記述を深化させることが今後の課題である。

【参考文献】

- 1) 大谷尚 (2008) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 第 54 巻第 2, 27-44
- 2) 大谷尚 (2011) SCAT : Steps for coding and Theorization : 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法
<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/index.html> (accessed 2018. 10. 28)
- 3) 白松賢 (2018) 子供の生活や学習の基盤をつくる学級経営の充実, 初等教育資料 5 No. 967 東洋館出版社
- 4) 中央教育審議会答申 (2018) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について